

優秀賞

弟の世界

名古屋経済大学市邨高等学校 1年

北河 須羅

我が家の壁は、どこも落書きで埋めつくされている。アニメのキャラクターや謎の生物、動物、風船：また、落書き以外にも、きちんと紙に描いた絵や折り紙が貼ってあって、私たち家族はそのゆかいな仲間たちに囲まれながら暮らしている。そんな我が家の壁、最初はまっさらだった壁をポツプツでカラフルに染め上げた犯人、それが私の弟である。

弟には「クレバー」という言葉がよく似合うと思う。奴は大変ずる賢く、イタズラ好きであり、家族はほぼ毎日と喋っていい程、奴のイタズラに翻弄されている。奴はそれを見て、いつも満足気に笑っている。壁の落書きもその一種である。

そんな弟は、イタズラと同じくらい、工作をするのが好きである。絵を描いたり、紙を切り貼りしたり、粘土をこねたり：それらに熱中し、器用に作品を仕上げていく。そうして出来た作品、とりわけ、お気に入りの作品を壁にどんどん貼っていく。それが、我が家の壁が賑やかたるゆえにある。

弟と私は普通の姉弟のように（普通の定義はさておき、便宜上、この文ではこう表現する）コミュニケーションを取ることができない。自閉症と発達障害を持った弟は、人と会話するのが少し苦手なところがあり、実際の年齢よりもずっと幼い。今の弟は昔に比べ、だんだん人と上手にコミュニケーションを取るようになってきたが、そんな今でも私は弟について知らないことが沢山ある。好き嫌い以上に深い部分には踏み込めない。それが寂しくなった時に壁を見ると、寂しさが少し和らぐ。落書きや絵には、描いた人の深層心理が現れるらしい。我が家の賑やかな壁からは、弟から見えている世界や彼の気持ちや伝わってくるような気が、ほんの少しだけする。そう感じた時、私はええも言われぬような不思議であったかい気持ちになるのだ。

これも、ずる賢い弟の「やさしくしてもらおう」という計算の内なのかもしれない。